
青藍執事の秘密

灯都和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青藍執事の秘密

【Nコード】

N2485BA

【作者名】

灯都和

【あらすじ】

「姫様。俺はあなたの願いなら、なんだつて叶えます」かつてあらゆる小国を攻め滅ぼした、「鬼の国」とも云われる過激な国ベルリガ帝国。そんなベルリガ帝国の姫君 エティシラが16回目の誕生日を迎えた時、彼女のもとに“新しい執事”がやって来た。「本日から、あなたにお仕えさせて頂く”執事”でございます」そう言って微笑む青眼の男ラオヴァルトは、ある秘密を抱えていて。

第一話（前書き）

タイトルは「せいらんしつじのひみつ」と読みます。

第一話

まだまだ春には程遠い、二月三日。
凍てつくような寒さのこの日、ベルリガ帝国の宮廷は一段と賑わっていた。

特に、国王ダーフィットと王妃コスタの高揚ぶりは相当のものであった。

それもそのはずだ。

今日はただ一人の子供である姫君エティシラの、16回目の誕生日なのだから。

「エティシラももう15歳とはなあ！」

グラスに注いだワインを一気に飲み干し、父が言った。

何百人もの使用人がずらりと並んだ大広間では、エティシラの誕生日パーティーが行われていた。

薔薇の紋様が施された正方形のテーブルを囲む、臙脂色えんじの大きいソファが四つ。

国王家族はその中の三つに、贅沢にも一人ずつ腰掛けている。

「ちよっとお父様、間違えないでよ。わたしは今日16歳になったのよ」

いつものものより少し値が張る桃色のドレスを纏った姫、エティシラは、真剣な表情で父に抗議するが、すっかりほろ酔い気味の父は「すまんすまん」と赤い顔で呑気に笑い出した。

今回の誕生日パーティーは、エティシラ本人の希望ではなく、娘を溺愛する両親が半ば強引に催したものだ。

余計な金がかかるから……とエティシラは遠慮したのだが、娘を溺愛する両親は半ば強引にパーティーを催してしまった。

溢れんばかりの愛情を注いでくれるのはとても嬉しいのだが、正直なところ早く終わってほしかった。

つい先程まで、自分の誕生日を祝うべく宮廷を訪れてくれた様々な客人の対応に追われっぱなしだったエティシラは、もうすっかり疲れきっている。

だから、休みたかったのに　このパーティーが終わらない限り、エティシラは休むことができない。

パーティーが終わって部屋に戻ったら、すぐにブルーノに愚痴をこぼそう……。

エティシラは大広間を見渡し、ブルーノの姿を捜す。

“ブルーノ”ことブルーノ＝デリウスは初老の男性で、エティシラの執事だった。

温和な性格のブルーノは、どんなワガママだって聞き入れてくれる。エティシラにとっては祖父のような存在だ。

「……あれ？」

かなり入念に捜したのだが、ブルーノの姿はどこにも無かった。

おかしいな、とエティシラは目を凝らして再び大広間を見渡すが、やはり彼は見当たらない。

「ブルーノは？」

誰に対してもなくばつりと呟くと、彼女の母が平然な顔で答えた。

「ブルーノなら、本日付けであなたの執事を辞めたけれど」

「辞めた!？」

勢い良くソファから立ち上がり、エティシラは思わず声を荒げる。

「ええ、辞めたのよ。奥さんが病気にかかってしまったらしいわ。だから、執事を辞めて奥さんの看病に努めるんですって」

「そんな……」

淡々と事実を述べる母に反して、エティシラはかなり落ち込んでいた。

ずっと、昔から。

少なくとも物心がついた頃には傍にいて、いつも自分の面倒を見てくれたブルーノ。

両親には言えないようなことも彼になら話せた。相談にもたくさん乗ってくれた。悪戯いたずらだつて数えきれないほどしてきたが、ブルーノは「姫としてあるまじき行為ですよ」説教をする代わりに両親には黙っていてくれた。

彼は執事であると同時に、一番の理解者だつた。

それなのに 何も言わずに、自分のもとから去っていつてしまふなんて。

「……あんまりじゃない。わたしに、一言くらい言ってくれたって良かったのに……。ひどいわよ」

ブルーノと数々の思い出を胸に、エティシラはややくきつく唇を噛み締めた。

「仕方ないさ。きつとお前に言つたら、絶対に引き止められると思つたのだろう。それに、余計に別れが辛くなるからな」

少し酔いが覚めてきた様子の父が、エティシラを宥なだめる。

「それに、安心しなさい。ちゃんと“代わり”は用意してあるよ」「代わり?」

父の言葉を暗唱して首を傾げたのと、大きな扉がギイイ……と音を立てて卒然と開いたのは 同時だつた。

エティシラは父の返事を待たずに、少し遠い扉の方へと視線を移す。

よく晴れた青空の上に、海の藍色を被せたような青藍色せいらんだつた。距離があつてもよく見える、開いた扉のもとに佇立する男の瞳は。

「姫様」

聞く者を陶醉させてしまいそうな、透明感のある声で男は言った。身に纏った燕尾服えんびふくと同じ、黒色の革靴で高級フローリングの床を歩き、呆然としているエティシラの元へゆっくりと近づいてゆく。サファイアの宝石のように美しい青藍色の瞳は、近くで見るとより一層美しく思えた。

黒い髪に、黒い服装。全身を黒一色で包んでいるからこそ、その青い瞳の美しさが余計に際立つのだ。

男は靱しなやかな動きで屈みこみ、その青眼でエティシラをまっすくに見上げる。

「だ……誰……？」

ようやくエティシラの口から放たれた問いに、「お目にかかれて光栄です」と男はふっと微笑む。

「俺はラオヴァルト＝デリウスと言います。本日から、あなたにお仕えさせて頂く”執事”でございます」

そのまま彼女の手を取り、ゆっくりと優しいキスを落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2485ba/>

青藍執事の秘密

2012年1月6日11時48分発行